



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099(226)5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行人 末吉卓也 1部60円年間共1100円

道標

【司教区昇格五十周年】 小教区が活性化し 教区が一つとなるように

宣教奉仕者養成講座始まる

信徒の自発的な司牧宣教活動に期待

十月二十三日(日)、宣教奉仕者養成講座が教区本部で行われた。現在、鹿兒島教区では終身助祭と信徒奉仕者の養成に取り組んでいる。後者の養成については教区、地区、小教区の三つのレベルで行う計画が立てられている。

今回の講座は「すべての信徒リーダーを宣教奉仕者に」という目的で、教区信仰養成委員会が地区レベルの養成として実施した。

の。来年三月の宣教奉仕者選任を目指して、鹿兒島地区では来年二月までの毎月第四日曜日に開催する予定で、今回はその第一回。

第一回目にあたる今回は、「宣教奉仕者について」というテーマで、①教会における信徒の奉仕職 ②宣教奉仕者の役割 ③鹿兒島教区における宣教奉仕者の役割 という項目に分けて説明された。説明を担当したのは、宣教奉仕者養成の

直接の責任者に委嘱されている永山幸弘神父(ザビエル教会主任司祭)。

参加者は、始良、加世田、鴨池、鹿屋、ザビエル、玉里、紫原、吉野の各教会から合わせて二十六人。

担当した永山神父は「現代社会に福音を伝えるためには現場である小教区が生きた教会になることが必要。このためには信徒が自発的に司牧宣教活動を担い、司祭と共に共同責任

を取らなければなりません。宣教奉仕者はそのためのリーダー。教会を愛する心でその任を引き受けて欲しい。もともと多くの参加者を期待している」と話している。

次回は、「日常の信仰養成」というテーマで、日常の教理学習のあり方と書籍

○九年の閉校と

鹿兒島純心学園との合併発表

学校法人 川内純心学園

学校法人川内純心学園理事長シスター末吉スナは、去る九月十五日、宇田美智枝校長と経営母体であ

る長崎純心聖母会森山敬子総長とともに、司教館に糸永司教を訪ねて川内純心高校の二〇〇九年三月末に閉

の勉強について京泊の教会のフランチスコ・モラレス神父は次のように書いています。

「洗礼を受けた人々の中に殉教者レオがいた。私はキリシタン達を訪問した時に彼の家に立ち

殉教者の記念は

もつともよい福音宣教

川内教会主任司祭 J・ハンマ

「川内の殉教祭」はもうすでに鹿兒島教区の当たり前のような年間行事のひとつになりました。今年も十一月二十日になっていきます(注)いつも十一月十七日に近い日曜日。



記念されるのは一六〇六年十一月十七日にその信仰のために殉教されたレオ税所七右衛門朝(あつとも)のことです。レオの信者としての生活は、僅か三か月と二十六日でした。洗礼

を受けるため公教要理の勉強の中で殉教になる覚悟を促した。要理

「寄り、われ等の聖なる信仰についての話をした。レオはよく理解し、私が、殿は侍がキリシタンになることを好まないの、あなたが信者になったら、殺されるかもしれない。信者になる

とができるものではないでしょう。このような固い決心のもとに彼は京泊のサント・ドミンゴ教会で洗礼を受けた。このように受けた信仰のため

に殉教にまで至るといふ覚悟で

前によく考えなさいと注意をした時に、彼は微笑んで次のように答えた。「神父様、私はお話を伺って、救いというものがあり、たとえ生命を失うことがあっても、私を教会から離れさせるこ

の受洗でした。洗礼を受けたオルファン神父は牢屋に入れられる少し前に書いた手紙で明瞭にそれについて述べています。

「私の宣教の始まりに、神は薩摩の国でイエス・キリストのために亡くなったレオという聖なる日本人の殉教によって私を慰め、私の弱さを強めてくださいました。彼は洗礼の時に私の前で宣言した信仰を守り、優しい言葉によっても脅迫によっても誰も彼をその信仰から遠ざけることができませんでした」

今年も薩摩初の殉教者ゆかりの地・川内に集い、その遺徳を讃えましょう。

川内殉教祭

11月20日(日)

場所 川内カトリック教会

1時 講演

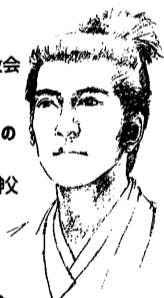
「レオ税所七右衛門時代の公教要理について」

講師 ヨゼフ・マイベルガー神父

2時 ミサ

3時 巡礼

京泊口ザリオの丘へ



薩摩の殉教祭 レオ税所七右衛門

お問い合わせ 川内カトリック教会 TEL 0996-22-3738 FAX 0996-22-4654

聖体について

教皇カテケジス

教皇ベネディクト十六世は、十月十五日(土)、サンピエトロ広場で、今年初聖体を受けたか、受ける予定の子どもたちを招いて「天のパン」というテーマで集会を司式した。参加者は、子どもが十万人、その家族とカテキスタ、小教区主任司祭などを合わせて合計十五万人。

この集会では七人の子ども(男子四人、女子三人)が教皇に質問を行い、教皇がそれらの質問の一つひとつ答えた。今月号と来月号の二面その一部を紹介する。

(全文は中央協議会のホームページ中の「教皇ベネ

11月23日に 典礼研修会開催

聖体に対する理解を深めるための教区典礼研修会が十一月二十三日(水)カテドラルと教区本部で開催される。

参加費は六百円。参加希望者は所定の申込書に記入の上、教区本部にファックス送信のこと。締切は十一月十三日(必着)。

新たに三人

ベトナム人神学生

ベトナム・ニャチャン教区のホア司教は八月、マニラで勉強中の三人の神学生を鹿兒島教区神学生として登録したと糸永司教に通知した。このことは、九月の鹿兒島司教区五十周年記念ミサの中で司教が紹介し

た。これでベトナム人神学生は、ティエン神学生と合わせて四人になった。



ジョン・ハアン・ティエン・ドゥン(神学部三年、28歳)

ヨゼフ・グエン・ホン・タン(神学部三年、28歳)



ヨゼフ・グエン・ホン・タン(神学部三年、28歳)



ヨゼフ・グエン・ホン・タン(神学部三年、28歳)

ディクト十六世の初聖体を受けた子どもたちとの集会でのカテケジス」に掲載されている。

聖体の年を総括

全司祭集会で

十月十八日(火)に開かれた定例全司祭集会では、聖体の年の司牧を総括する話し合いが行われた。

この一年間教区の小教区主任司祭などを合わせて合計十五万人。

多くの小教区でこのような聖体礼拝は久しぶりの経験であり、「実施してよかった」「できれば今後も適宜実施したい」との感想を持った様子である。

午後、その中から浮かび上がった今後の課題を時間いっぱい話し合った。

最後に、司教は次のように総括した。①聖体やミサの用語など見近なことから正しく身につける②ミサ典礼の総則を学ぶ③誰も知らないことを望まない。初

聖体から堅信の間に要理の復習を④司祭一人では十分な働きは無理、信徒奉仕者たちと力を合わせて努力する事を考えて欲しい。

「ノアの洪水」物語①

聖書の人間理解 (8) 竹山 昭

「ノアの洪水」(創六・九)は、聖書学者によれば、祭司伝承による洪水物語によよそ八箇所でヤヴエ伝承からの洪水物語が差し込まれている。その結果、洪水の原因が二度語られたりノアが箱船に二度入ったりなど重複が見られたり描写にずれがあったりするようになる。とはいえ、基本的な主題に關しての大きな齟齬はない。

今回は洪水の原因を語る部分を取り上げておこう。

ヤヴエ伝承による洪水の原因

ヤヴエ伝承によれば「主は地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造つたことを後悔し、心を痛められた」(六・6)。しかし、「ノアは主の好意を得た」(同8)。

命の息を神から吹き入れられた人間は、楽園追放物語では、ただ一つの禁令を守らず、神に背いて追放された。カインとアベル物語では嫉妬から兄弟を殺して追放されたが、いまや悪いことしか考えなくなってしまうというのである。

人間は神の前に応答責任を負う者として造られたのであって、神の操り人形ではない。神の禁令にどう応えるか自分で決めなければならぬ。

「心を痛める」は、楽園追放で女に与えられた産みの「苦しみ」、男に与えられた食物を得る「苦しみ」と同根の言葉だという。神に關してはここでしか用いられない。洪水を起すことは、神が同じく苦しみを背負うことになるというのである。

ただひとりノアだけが「主の好意を得た。しかし、なぜ好意を得たのか何もしるされない。まるで神の一方的な決定であるかのような印象を受ける。カインとアベル物語の捧げ物の場合のように…」

祭司伝承による洪水の原因

一方、祭司伝承はこう述べる。「この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なるものはこの地で墮落の道を歩んでいった。神はノアに言われた。「すべて肉なるものを終らせるときがわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす」(六・11-14)。

「すべての肉」とは人間

伝承は、神が定めたこの秩序を乱し、力に訴えて弱肉強食に走ったために地が荒廃したことが洪水の原因とみていることになる。

祭司伝承は、ことさらに肉食主義を主張しているわけでもあるまい。そうではなく、神が定めた人間を含む自然界の秩序を地上の生き物が「破壊した」ので、神が生き物を破壊することによって自然界の秩序を再構築することにしたというのである。

素朴なヤヴエ伝承にしろ、秩序感覚に優れた祭司伝承にしろ、その思想は多少異なるとはいえ、洪水による滅亡の原因を、人間を中心とする罪の普遍的な広がりの中に見ていることになる。類似の中近東に伝わる神話では、結局神々の勝手都合に原因が置かれる。たとえばバビロニアの洪水神話で、洪水の原因が人間が神々の睡眠を妨げたからだとされるのは、全く趣を異にするのである。

祭司

アンドレア「カテキスタの先生が、イエスが聖体の中におられるとおっしゃいました。でも、どうやってイエスは聖体の中におられるのですか。わたしはイエスを見ることができません」。

教皇「ええ、わたしたちはイエスを見ることができません。でも、目に見えなくても、存在する、大事なものがたくさんあります。たとえば、わたしたちは自分の頭の中を見ることができません。でも、わたしたちは考えています。わたしたちは心を見ることができません。でも、心は存在します。そして、心が働いているのがわかります。なぜなら、わたしたちは、話したり、考えたり、なにかを決めることができるからです。ですから、ほんとうの意味でわたしたちの生活と、わたしたちが住んでいる世界を支えている」。

教皇さまへの

子供たちの質問

「十字架の使徒会祈りの意向」 小教区の活性化

1日(火) 諸聖人
▼芦花部教会献堂記念日(一九一九年)
▼百合の寮開設(一九五九年)

2日(水) 死者の日
▼教区本部会議・教区本部・10時
▼年間第三十二主日

6日(日) 年間第三十二主日
▼ラテラン教会の献堂
▼メニヒ神父霊名(テヨドル)

<KABAYAN SEKSIYON>
"Huwag kang Magnanakaw"

Ang pangpitong kautusan ay "Huwag kang magnanakaw". Ang pangpitong kautusan ay nagbabawal sa hindi makatarungan pagkuha o pagtago sa bagay ng kapwa, at paggawa ng masama sa kanya sa ibang paraan base sa kanyang mga bagay. Itinuturo ang makatarungan at kawang-gawa sa pangangalaga ng mga bagay dito sa mundo at ang bunga ng trabaho ng tao. Para sa ikakabuti ng lahat, kailangan ang paggalang sa pandaigdigang patutunguhan ng mga bagay at ang paggalang para sa karapatan ng sariling pag-aari. Ang kristiyanong pamumuhay ay naghangad sa kaayusan ng mga bagay dito sa mundo para sa Diyos at para sa pagmamahal sa kapwa.

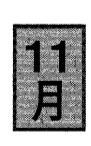
Sa simula pa lang ipinagkatiwala ng Diyos ang mga bagay dito sa mundo sa pangangalaga ng tao. Sa pamamagitan ng pagtrabaho, sila ang makapangyari at sila rin ang magtatamasa ng kanilang mga bunga. Ang lahat ng nilikhang bagay dito sa mundo ay patungo para sa sangka tauhan. Dahil ito ang plano ng Diyos sa simula pa lang. Ang tao ang mamahala at magbabahagian.

Ang pagnanakaw ay hindi lang ang pagkuha ng mga bagay, halimbawa sa trabaho, dinadaya ang oras ng pagpagsok, sa pagtitinda, pagdadaya sa timbang, paglalaro ng kartas, nandadaya at iba pa. Ito'y pagnanakaw sa karangalan ng kapwa-tao at itoy kasalanan sa mata ng Diyos. Hindi ito maka-kristiyanong gawain. Kaya ang turo ng Simbahan ay turo mismo ng Panginoon Jesus. Dahil ang paggalang at pagmamahal sa kapwa, lalo na sa mahihirap ay paggalang at pagmamahal din sa Panginoon Jesus. Dahil sinasabi dito sa pangpitong kautusan: Binibiyayaan ng Diyos ang lahat ng tumutulong sa mahihirap at pinagagalitan ang tumatalikod sa kanila. "Bigyan mo ang humihingi saiyong at huwag mong tangihan ang naghihirap saiyong". "Tinanggap ninyo ito ng walang bayad kaya ibigay rin ninyo nang walang bayad".

Itong bagay na ginawa para sa mga mahihirap ay makikilala si Jesukristo sa kanyang mga pinili.

Kaya mga Kababayan, mula ngayon buksan natin ang ating mga kamay at puso sa pangangailangan ng ating kapwa at huwag tayong maghinayang sa ating ginagawang alay-kapwa.

Patnubayan nawa kayo ng Panginoon Diyos sa araw-araw ninyong pamumuhay. Hanggang sa muli.



13日(日) 年間第三十三主日
14日(月) 教区司祭会・司教館・16時
15日(火) 定例司祭集会・教区本部・10時
17日(木) レオ税所七右衛門敦朝殉教(二六〇六年)
20日(日) 王であるキリスト

▼三木巖神父命日(二〇〇〇年)
▼聖書週間(27日)
神の愛を知り、神の心を受け取るために、わたしたちは新約聖書と旧約聖書を神のことばとして読み、大切にします。「聖書週間」は、すべての人、とくに信徒が、この聖書に「より強い関心を持ち、親しみ、神の心に生きる」ようになるための週間です。

各教区では、聖書への関心を高め、より親しむために、講演会、研修会、展示会などの催しが計画されます。このような催しに参加するとともに、自分でも積極的に聖書に近づきましょう。たとえば、毎日欠かさず聖書を一章ずつ読む方法や、ミサにあずかれなくても、ミサの聖書朗読の当日分を毎日読む方法も勧められています。

23日(水) 教区典礼研修会・カテドラル・10時30分
27日(日) 待降節第一主日
30日(水) 聖アンデレ使徒



3日(土) 聖フランシスコ・ザビエル
▼小川靖忠神父叙階記念日(一九七二年)

聖霊の恵みいっぱいを受けて派遣 谷山・鴨池・大熊教会で堅信式



司教に油を塗られる受堅者(鴨池)

十月に入り、各地で堅信式があった。九日(日)に谷山教会で七人、十六日(日)に鴨池教会で七人、二十三日(日)には大熊教会で十四人が各教会を訪れた糸永真一司教から堅信の秘跡を受け、聖霊の恵みいっぱい教会の使命に派遣された。

以前は地区ごとに合同で行われていた教区の堅信式だが、小教区の活性化を掲げる教区は一昨年から小教区ごとに堅信式

を行うことにしている。これは、小教区共同体で堅信を祝うことにより、その恵みを受けて小教区がよりダイナミックに活動していくようという意向がある。

九日の堅信式で七人の信徒が受堅した谷山教会(主任・ムーベルガ神父)では信徒約百三十人が集い、聖歌隊と鹿児島国際大学の学生による合奏による豊かな聖歌と共にミ

サが行われた。ミサの中で糸永司教は「久保助祭らの終身助祭叙階や福岡での神学講座を受講した信徒の方々の姿に聖霊の働きを感じる。堅信の秘跡で聖霊の力をいただいた、キリストの教えをいっぱいにするよう働いて欲しい」と話した。受堅者の中にはカメルーンからの留学生もいて、ミサ後の司教を囲んでの茶話会では、国際色豊かで和やかなものだった。

十六日に行われた鴨池教会(主任・泉浩二神父)の堅信式には約百二十人の信徒が集い、七人が堅信の恵みを受けた。ミサの中で糸永司教は、この日の福音書から「神のものは神に返す。すべてのものは神のもので神の望みにこたえてすべてをささげなければならぬ。教会の使命はすべての人をキリストのもとに集め、世界を神の望みにな

うよう福音化することにある。堅信の秘跡で教会の使命に呼ばれて派遣される」と語った。九月に叙階されたばかりの桃瀬淳一郎助祭も糸永司教と泉神父と共に祭壇を囲み奉仕し、堅信式のミサは一層の荘厳さを見せていた。ミサ後に司教を囲んで行われたパーティーでは、桃瀬助祭の終身助祭叙階のお祝いも行われ、堅信と叙階、二つのお祝いに集まった信徒も喜びいっぱいだった。

長崎教区は、長崎・天草の教会と巡礼地を紹介する新しいガイドブックを作成した。巡礼者だけでなく一般の人にも向けられて作られている。内容は、長

崎の教会の歴史について説明した後、第一部として全小教区について地区ごとの紹介、第二部としてキリスト教にまつわる史跡の紹介、付録として教会とキリシタン用語集、紹介した教会のミサの時間、交通案内、聖堂に入るときのマナーなど大変充実している。英語版とハンズフリー版もあり、定価は税込みで日本語版は一、六八〇円、英語・ハンズフリー版は一、〇五〇円。

集、紹介した教会のミサの時間、交通案内、聖堂に入るときのマナーなど大変充実している。英語版とハンズフリー版もあり、定価は税込みで日本語版は一、六八〇円、英語・ハンズフリー版は一、〇五〇円。販売はカトリック系販売店と長崎教区本部で取り扱っている。

司教が和光園訪問

十月二十三日(日)、糸永司教は国立療養所奄美和光園内にある和光園教会(大熊小教区巡回・信徒数三十一人)を七年ぶりに訪れ、出迎えた十九人の信徒と共に祈りをささげた。糸永司教は「すべてを神様にささげて鹿児島教区のために祈ってください」と決意を新たにしていた。

皆でザビエルの道を辿る

九州青年キャンプ

秋空にしては暑い日差しと急に振り出す激しい雨のなか、九州各地から集まった青年たちがザビエルの足跡を辿り、伊集院まで二十四キロの道を歩いた。

毎年恒例になりつつある、フランシスコ・ザビエルが島津藩主島津貴久に布教許可を求めて会見したといわれる伊集院城山公園までの青年たちの徒歩巡礼、今年も十月二日(日)に、九州地区の青年たち合同で

行われた第五回九州青年キャンプの中で行われた。キャンプには鹿児島・福岡・宮崎からの参加者があり、三十人余の青年たちが十月一日(土)からザビエル教会と教区本部を利用して、ゲームやザビエルについての寸劇、テーマ「二(はじめ)」についての分かち合いや巡礼の時の旗作りなどを通して交流を深めた。

翌日の朝7時半にザビエル教会を出発した青年た

ちは、険しい坂や照りつける日差しなどものともせず、ザビエルが味わった当時の苦勞に思いを馳せながら若者らしく楽しく元気づく歩いた。伊集院の町に入ったところ、突然の大雨に見舞われたが、歩いてきた青



準備に携わったザビエ

年たちはここまで来た最後のまで歩こう!と大雨の中をすぶ濡れになりながらも歩き通した。午後一時半ごろ城山公園に到着した頃には先ほどの雨がうそのように晴れわたり、青年達は昼食も後回しに末吉神父の司式によりミサをささげ、ザビエルに感謝しながら自分たちも前に進む一歩を勇気と希望を持って踏み出すことが出来るよう祈りをささげた。

ミサ後にみんなで弁当を食べながら楽しそうに語り合う青年たちからはさわやかな達成感と充実感が漂っていた。

短信

小神体験入学

十月二十二日(土)から二十三日(日)まで、小神学校の長崎カトリック神学院で小学五年生から高校二年生を対象に体験入学があった。鹿児島からは、園田克也君(玉里・中二)、石堂陸君(鴨池・小五)、大田聖君(鴨池・小五)の三人が参加した。全体の参加者は、長崎、福岡、大分、

鹿兒島の各教区合わせて五十人余り。現在、小神学生は中学、高校合わせて三十人。ドッジボール、神学生の一日のビデオ上映、ロザリオ、ミサ、神学生の話など盛りだくさんのプログラムは作成も進行も神学生が行った。鹿児島教区の田代竜之神学生とも初めて会った鹿兒島の三人の参加者は、片道五時間余りの移動に疲れながらも「楽しかった」、「来年もまた来たい」と話していた。

純大で信者学生の交流

十月九・十日に、鹿児島純心女子大学のカトリック学生会(セントメリー

ズハート)が同大学川内キャンパスで長崎純心大学のカトリック学生会と交流会を行った。この交流会は昨年長崎で行われたのに続き二度目で、川内や鹿児島教区の教会や大学キャンパスなどを巡ったりバーベキューを行ったりして交流を深めた。

セントメリーズハートは「カトリックの精神をもとに活動するサークルがほしい」と学生が立ち上げたもので、毎月の祈りの集いなどを行っている。メンバーの一人の久保泉さん(川内教会)は「信者でなくても入りやすい雰囲気ですよ」と話した。



司教と祈りをささげる

諸聖人の日を迎えて

出水教会主任司祭 W・フリチエル

教会は十一月一日、諸聖人の祭日を祝います。この祝いは、実は教会の家族の祝いであります。この日、私たちは皆、キリストの兄弟姉妹で、一つの大きな霊的な家族であることを感じます。そして、たくさん兄弟姉妹がこの世の長い道を通じて戦いや試練を乗り越えて、ついに目的地に達し、神のみ業に入ったことを共に喜び祝うのです。

教会は十一月一日、諸聖人の祭日を祝います。この祝いは、実は教会の家族の祝いであります。この日、私たちは皆、キリストの兄弟姉妹で、一つの大きな霊的な家族であることを感じます。そして、たくさん兄弟姉妹がこの世の長い道を通じて戦いや試練を乗り越えて、ついに目的地に達し、神のみ業に入ったことを共に喜び祝うのです。

また諸聖人のお祝いは、私たちに近い兄弟姉妹、友人を思う祝いで、特別に親しい家庭的な祝いであります。というのは、この祭日は

「ゆらい・あい」では今年六月から毎月第二と第四土曜日に、み言葉とご聖体にかきかき、互いの霊的交わりを大切に、神ともっと親しくなり、神に向かう



フリチエル神父

文芸

俳句 (思川俳句会作品)

純心学園 山頭信子
落葉掃き桜もみじを懐に
眠れぬ夜枕の下か蝶が鳴く
(評) 学びたい結句、特に「けら」の
声を

鹿兒島 本城 愛

短歌 (思川短歌会作品)

純心学園 川上 和
名も知らぬ花に魅されて、
手には紫映ゆる

鹿兒島 龍門司真人
しなやかにゆるるコスモス秋の波
思川画ぐ一句に鮎おどる

出水 遠竹睦郎
黄金なす稲穂は垂れて秋深し
鹿兒島 徳永ノブ子
秋冷や厨立つのも心地よき
鹿兒島 春山マリ子
十五夜の月の光りの眩きぬ
純心学園 田村鏡子
草刈られしおれて生を元す

鹿兒島 春山マリ子
古仁屋 豊島忠司
マリアの像脇に片寄せ父母の位牌を
守るは罪ととも善し
純心学園 川上 和
名も知らぬ花に魅されて、
手には紫映ゆる

鹿兒島 本城 愛
声かける見舞いの客にほころびる老
いし笑顔に心安らぐ
鹿兒島 田平新太郎
黄母をつんでは食む幼日を憶へる女と
久しく語る

鹿兒島 春山マリ子
わが暮らし多忙と言はむ日々なれば妻の
作りしコロッケを食む

鹿兒島 春山マリ子
わが暮らし多忙と言はむ日々なれば妻の
作りしコロッケを食む

で祝いましょう。

聖人たちはどんな道を歩いて、天国の門に着いたのでしょうか。聖人は、神の方へ心の耳を傾けて、神が示す道を忠実に歩みまします。聖人は自分のわがままを通さず、いつも神の導きに忠実についていくように努力したのであります。しかし、それが神の恩恵であります。

「ゆらい・あい」では今年六月から毎月第二と第四土曜日に、み言葉とご聖体にかきかき、互いの霊的交わりを大切に、神ともっと親しくなり、神に向かう

「ゆらい・あい」では今年六月から毎月第二と第四土曜日に、み言葉とご聖体にかきかき、互いの霊的交わりを大切に、神ともっと親しくなり、神に向かう

「ゆらい・あい」の活動

高齢者の集いを始めて

心を育てるために食事を共にしながらひとときを過ごす「高齢者の集い」を開催しています。

「この会は送迎があるから司教ミサにあずかることができ」と喜ばれたり、近くに住んでいながら何年か振りに会えたという兄弟

立で、その時期の旬の食材を使った美味しく、珍しい、身体にやさしい食事をいただきます。食事の後は祈りとレクリエーションをしま

今年も多くの信徒の皆様が来られたこと、集まる人数も目に見えぬ証として大切ではあります。なによりザビエル様を記念して共に祈るこの記念祭が教区の大きな行事として三十一年もさまたまな工夫や試みに挑戦しながら毎年八月に続けて行われていることがすばらしいことだと思えます。

また、青年たちもここ数年、ザビエル様が宣教許可の為に島津貴久と会見したことを記念して九月

ザビエルさまの散歩道

妙円寺参りに負けないぞ!

今年も多くの信徒の皆様が来られたこと、集まる人数も目に見えぬ証として大切ではあります。なによりザビエル様を記念して共に祈るこの記念祭が教区の大きな行事として三十一年もさまたまな工夫や試みに挑戦しながら毎年八月に続けて行われていることがすばらしいことだと思えます。

また、青年たちもここ数年、ザビエル様が宣教許可の為に島津貴久と会見したことを記念して九月

また、青年たちもここ数年、ザビエル様が宣教許可の為に島津貴久と会見したことを記念して九月



また、青年たちもここ数年、ザビエル様が宣教許可の為に島津貴久と会見したことを記念して九月

講演会 「神はあなたに話したい」

日時 11月24日(木) 13時45分
場所 ザビエル教会聖堂(二階)
講師 晴佐久昌英神父(東京教区司祭)
主催 鹿兒島カトリック女性信徒の会

す。これまで紙芝居やマジックショー、手話、歌やハーパー、自分のためのロザリオ作りなど、色々なことを楽しみました。

週刊カトリック新聞

1部本体価格150円(税・送料別)
購読料金(前納、税・送料込)
半年4740円・1年9480円

見本紙贈呈いたします

「へえ、日本の教会は今こうなんだ・・・」
ザビエル

カトリック新聞は、日本のカトリック教会唯一の週刊全国紙です。全国、海外の購読者様のお手元へ毎週直送いたします。また、全国のサンパウロ・女子パウロ会書店でも販売しております。

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館5階 カトリック新聞社
TEL 03-5632-4432 FAX 03-5632-7030 Email kodoku@cwjpn.com